



被使役者：モンゴル語の使役構文の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/683

被使役者：モンゴル語の使役構文の研究

その他（別言語等） のタイトル	Causee: A Study of Mongolian Causative Constructions
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	38
ページ	85-123
発行年	1988-11-10
URL	http://hdl.handle.net/10258/683

被使役者：モンゴル語の使役構文の研究

橋本邦彦

Causee: A Study of Mongolian Causative Constructions

Kunihiko Hashimoto

Abstract

The surface forms of causees have zero case, accusative, reflexive-possessive, instrumental, dative and zero forms in Mongolian (Khalkha dialect). The main purpose of this paper is to find and formulate, from the viewpoints of syntax, semantics and functionalism, several principles which govern the occurrence of six types of causees. The whole study leads us to the conclusion that the "Complementarist" approach is effectively applied to various grammatical problems.

1 問題の所在

ある行為や状態が何らかのきっかけで惹き起こされる様を表す言語上の手段の一つに、使役構文がある。モンゴル語（ハルハル方言）の使役構文は、動詞語幹に使役形接尾辞を付加して形成された使役形動詞を含む文である。この使役形接尾辞は4種類ある。それをを用いた使役形動詞の形成過程は、次の通りである。

(1) a. - уул/- ҮҮл¹⁾

яв-"to go" + - уул → явуул-"to make someone go, send"

гий-"to shine" + - ҮҮл → гийгҮҮл-"to illuminate"²⁾

b. - лга ~ - лго ~ - лгэ ~ - лгθ

уу-"to drink" + - лга → уулга-"to have someone drink"

хθθ-"to persecute" + - лгθ → хθθлгθ-"to make someone persecute"

- c. -га~-го~-гэ~-гθ
 бос-“to rise”+-го→босго-“to raise”
 хҮр-“to reach”+-гэ→хҮргэ-“to send”
- d. -аа~-оо~-ээ~-θθ
 хат-“to dry”+-аа→хатаа-“to dry (v. t.)”
 зов-“to worry”+-оо→зовоо-“to cause to worry”

但し、小沢（1963：180）が述べているように、（1c）と（1d）は自動詞を他動詞化する接尾辞としての機能を持ち、残りの2つの接尾辞に較べると生産性も低い。したがって、以下では、（1a）と（1b）の接尾辞を含む使役形動詞を中心に使役構文の考察をしていくことにする。

モンゴル語の使役構文の例を見てみよう。

- (2) a. Тэр намайг явуулав
 he I-ACC go-CSTV-PST
 “He let me go.”
- b. Багш Гэрэлийг самбар дээр Үсэг бичүүлсэн
 teacher Gerel-ACC blackboard on letter write-CSTV-PRF
 “The teacher had Gerel write a letter on the blackboard.”

使役構文の典型的な特徴の一つは、文の主語が2つあるということである。

（2a）では使役の発動をする主語が主格形の тэр という形で、また、動詞語幹の直接の行為者を示す主語として対格形の намайг が現われている。主格形の主語は対格形の主語にある種の行為／状態を実現させる働きかけをするので、「使役者（causer）」と呼ばれる。一方、対格形の主語は、その働きかけを受ける側にあるので、「被使役者（causee）」と名付けられている。「彼（＝使役者）が私（＝被使役者）に何らかの働きかけをすることで、私は行くという行為をする」のである。

（2b）についても同様に、багш を使役者、Гэрэлийг を被使役者とみなすことができる。

使役構文の第2の特徴は、使役化を示す文法上の標識があることである。モ

ンゴル語では、先に述べたように、使役形接尾辞が使役化の標示をする。(2)について言うなら、動詞語幹とテンス／アスペクトの接尾辞との間にある接尾辞がこれに当たる。

使役構文の3番目の特徴は、使役化以前の文が、自動詞構文でも他動詞構文でもどちらでもよいということである。(2)の各文の使役化を受ける前の文を抽出すると、(4)のようになる。

(4) a. Би явав

I go-PST

"I went (there)."

b. Гэрэл самбар дээр Үсэг бичсэн

write-PRF

"Gerel wrote a letter on the blackboard."

(4a)は自動詞構文、(4b)は他動詞構文である。

2つの主語の存在、使役化標識の存在、及び、自動詞構文と他動詞構文の双方の使役化の可能性の3つの特徴は、モンゴル語だけに限らず、ほとんどの言語の使役構文が共有している特徴である。他方、被使役者の実現形は、言語ごとに多様性があるように思われる。モンゴル語の被使役者には、ゼロ格形（形の上では主格形と同形であるが機能の点で異なる）、対格形、再帰—所有形、具格形、与格形、ゼロ実現（被使役者が文の表層に現われない形）の6つの実現形がある。これらの実現形の出現の条件、もしくは出現を支配する原則があるのか、また、あるとしたら、それは何かを究明するのが本稿の主な目的である。

第2節では、被使役者が対格形、ゼロ格形、再帰—所有形の場合を考える。第3節は、具格形と与格形の被使役者の出現の要因を明らかにする。第4節ではゼロ実現に2つのタイプがあることを指摘し、第5節では使役形動詞の語彙化について触れてみたい。

2 ゼロ格形, 対格形, 再帰—所有形の被使役者

2—1 自動詞語幹の使役構文

使役形動詞の語幹が自動詞である場合, 使役化を受ける前の文は直接目的語を伴わない自動詞構文である。この点に注目しつつ, 3つのタイプの被使役者と語幹動詞との関係を順次観察していくことにする。

最初に, 被使役者が対格形の場合を見てみよう。

- (1) a. Гэрэл Ватыг ш θ н θ ирҮүлнэ
 Gerel Bat-ACC night come-CSTV-PRS
 “Gerel has Bat come at night.” (Bn)
- b. Энэ газрын чийг миний биеийг муудуулж
 this place-G dampness I-G body-ACC worsen-CSTV-CNV
 байна
 be-PRS
 “The dampness of this place is affecting my health.” (CD)
- c. Нар малчны хашаа гэрийг гийгҮүлэв
 sun shepherd-G fence house-ACC shine-CSTV-PST
 “The sun shone on the shepherd’s pen.” (y)

(1)の各文の統語構造は, 次のようである。

- (2) a. s_1 [Гэрэл s_2 [Ватыг ш θ н θ ир-] Үүлнэ]
 b. s_1 [Энэ газрын чийг s_2 [миний биеийг мууд-] уулж байна]
 c. s_1 [Нар s_2 [малчны хашаа гэрийг гий-] Үүлэв]

これらの構造から, (1)の使役構文は(3)のような自動詞構文を埋め込み文としてもっていることがわかる。

- (3) a. Ват ш θ н θ ирнэ
 “Bat comes at night.”
 б. Миний бие муудаж байна.

“My body is getting worse.”

с. Малчны хашаа гэр гийв.

“The shepherd’s pen shone.”

自動詞構文の主語は、語幹動詞の使役化によって主格形から対格形に変わり、(1)のような文が生成するのである。

観点をえて、被使役者の意味上の役割を語幹動詞に照らして明らかにしよう。(1 a)では、使役形動詞の語幹は ир-“to come” で行為動詞であり、被使役者 Ватはその行為を行なう行為者 (Agent) である。一方、(1 b)の語幹動詞 мууд-“to worsen” は状態動詞であるから、被使役者 миний биеはその状態の影響を被る被態者 (Patient), すなわち非行為者 (Nonagent) ということになる。こうしてみると、使役構文の被使役者が対格形であることと、それが行為者か非行為者かであることとの間には、何ら相関関係がないことがわかる。

では、生物性 (animacy) はどうかというと、なるほど(1 a)と(1 b)の被使役者は片や人物であり片や身体である点から [+animate] であるが、(1 c)の малчны хашаа гэрのように [-animate] の名詞句も対格形で現われているのだから、無関係と言わざるを得ない。

次に被使役者がゼロ格形の文を見る。

(4) a. Та энэ таслагаанд хүн битгий оруул

you this room-L man PRHBTV.PRTCL enter-CSTV

“You don’t let any men enter this room.” (Ha)

b. Бороо ногоо ургуулдаг.

rain grass grow-CSTV-HBT

“The rain makes grass grow.” (Bn)

c. Энэ тасалгаа салхи оруулах хэрэгтэй

this room wind to enter-CSTV be necessary

“This room needs be aired.” (CD)

統語構造と使役化以前の自動詞構文は、それぞれ、次のようである。

(5) a. _{S1} [Та _{S2} [энэ таслагаанд хүн битгий ор-] уул]

- b. s_1 [Бороо s_2 [ногоо ург-] уулдаг]
- c. s_1 [Энэ тасалгаа s_2 [салхи ор-] уулах хэрэгтэй]
- (6) a. ХҮн энэ таслагаанд орж болохгүй³⁾
 “Nobody is allowed to enter this room.”
- b. Ногоо ургадаг.
 “Grass grows.”
- c. Салхи орно
 “The wind enters.”

被使役者がゼロ格形の場合も、対格形の場合と同様に、行為者であっても ((4 a)), 非行為者であっても ((4 b)), あるいは無生物であっても ((4 c)), 全く関係ない。

最後に、再帰—所有形の被使役者について観察する。

- (7) a. Дулаан хашаа бэлтгэснээр тэд малаа онд
 warm pen prepare-PRF-INSTR they cattle-RFL year-L
 сайн оруулав
 well enter-CSTV-PST
 “As a result of having prepared a warm pen, they protected their
 stock well.” (St)
- b. Тэр эрҮүл мэндээ сайн болгов.
 he health-RFL well become-CSTV-PST
 “He improved his health.” (Bn)
- c. Зараа θ рг θ с $\theta\theta$ х θ д θ лг θ в.
 hedgehog thorn-RFL move-CSTV-PST
 “The hedgehog moved his thorns.” (y)

統語構造を次に記すが、(7 a)の前半の副詞節は省略する。

- (8) a. s_1 [Тэд s_2 [малаа онд сайн ор-] уулав]
- b. s_1 [Тэр s_2 [эрҮүл мэндээ сайн бол-] гов]
- c. s_1 [Зараа s_2 [θ рг θ с $\theta\theta$ х θ д θ л-] г θ в]

埋め込み文 S_2 の復原形は、(9) のようになる。

- (9) a. Тэдний мал онд сайн оров.
 “Their cattle passed the winter.”
 b. Түүний эрүүл мэнд сайн болов.
 “His health became good.”
 c. Түүний θ рг θ с х θ дл θ в.
 “Its thorns moved.”

再帰—所有形も、対格形やゼロ格形と同じく、意味上の役割も生物性も、その形の選択に関与していない。(7a)では被使役者 малは op -“to enter” という行為の行為者であり、(7b)の эрүүл мэндは сайн бол-“to become good” という状態を被る被態者（非行為者）であり、(7c)の θ рг θ сは生物性をもっていない。

このように、3つのタイプの被使役者の出現状況を眺めると、3者の間に共通する点はあっても、相違する点は何ら存在しないように思われる。いったい、3者間の交替を惹き起こす引き金となるものは何なのだろうか。

橋本(1987)で、対格の目的語は意味的には指示性を表し、機能的にはトピック性を担っていることを証明した。指示性とトピック性が相互に関連し合いながら、対格の目的語の出現を規定しているというわけである。

自動詞構文の主語が使役化を受ける際に、対格形をとるのかゼロ格形をとるのかに関しても、同じ意味的／機能的原則が働いているように思われる。その根拠となる例をいくつか列挙してみることにしよう。

第1に、代名詞は指示性のもっとも強い名詞であるが、使役構文ではかならず対格形をとる。

- (10) a. Би түүнийг энд оруулав.
 I he-ACC here enter-CSTV-PST
 “I let him come here.” (Ha)
 b. Би Билигийг эмнэлэгт хэвтүүгэв.
 I Bilig-ACC clinic-L lie down-CSTV-PST

“I made Bilig lie down in the clinic.” (Ha)

(10)の各被使役者をゼロ格形にすると、非文法的な文になってしまう。

(11) a. * Би тэр энд оруулав.

b. * Би Билиг эмнэлэгт хэвтүүлэв.

第2に、使役構文は使役者と被使役者の2つの主語をもつものであるが、命令文以外で使役者が現われないことがある。

(12) a. ХҮн бүгдийг оруулна.

man all-ACC enter-CSTV-PRS

“Everyone is admitted to enter.” (CD)

b. Цөмийг зааврын ёсоор явуулац

all-ACC instruction-G according to progress-CSTV-PST

“Everything was carried out according to instructions.” (CD)

(12a)では数量詞付き名詞句 *хҮн бүгдийг* が、(12b)では単独の数量詞 *цөмийг* が、被使役者であり対格形である。本来一次的トピックを担うはずの使役者（主格形主語）が差し押えられ（suspended）、二次的トピックの被使役者（対格形主語）が一次的トピックの位置に昇格したと考えることができる。

第3に、使役構文自体が限定句となる場合に、限定される名詞句（被使役者）は対格形で現われる。これは英語の制限的關係詞節と先行詞の關係に対応しており、限定される名詞句は指示性が高くなる。

(13) Бид, голын хойт талд гараад, тосож

we river-G north side-L go out-CNV go to meet someone who is coming-CNV

ирүүлсэн морьдыг унаж, ... давхин одлоо.

come-CSTV-PRF horse-ACC fall down-CNV gallop-G go away-PRF

“We got out (of the boat) on the north side of the river, and mounting the horse that had (been) sent to meet (us) ... set out at a gallop.” (St)

該当する部分を抜き出すと、次のようになる。

(14) a. тосож ирүүлсэн морьдыг

b. NP [S [тосож ирҮҮлсэн] NP [морьдыг]]

(14a)は(14b)の構造をもっている。この限定句(Sの部分)付きの名詞句(Sの後のNPの部分)から、(15)の使役構文をつくることができる。

(15) Бид морьдыг тосож ирҮҮлсэн.

“We had the horse sent to (us).”

対格名詞句は通常の使役構文の被使役者になる。

以上3つの事例は、被使役者が対格形となるときに、指示性／トピック性が関与していることを示しているが、今度は、ゼロ格形の被使役者が正反対の基準、すなわち、非指示性／非トピック性によりその出現が決定されていることを証明する例を記そう。

1つは、否定命令の使役構文で、ゼロ格形の被使役者に特定の読みはでない。

(16) Энд хҮн битгий сүүлга.

here man PRHBTV.PRTCL sit down-CSTV-0

“Dont't let any man sit here!” (Ha)

(16)の被使役者 хҮнは不特定の人すべてがその対象となり、指示性はない。

次に、総称文(generic sentences)の解釈をもつ使役構文は、ゼロ格形の被使役者の出現を許す。(4b)を(17)としてもう一度取り上げて、このことを説明する。

(17) Бороо ногоо ургуулдаг.

“The rain makes grass grow.”

動詞の右端に習慣を示す接尾辞-дагが付いていることからわかるように、この文は「雨は草を成長させるものだ」くらいの読みで、特定の草の含意はない。それは、この接尾辞の存在する文の、一様に不特定の解釈しかできない事実からも傍証できる。

(18) a. Зун халуун болдог.

summer hot become-HBT

“In summer it is hot.” (V)

b. Энэ танхимд кино гардаггүй.

this hall-L film show-HBT-not

"In this hall no film shows." (V)

これまで、被使役者の対格形の指示性／トピック性とゼロ格形の非指示性／非トピック性を5つの事例をあげて説明したが、さらに詳しい説明については橋本(1987)を参照して頂きたい。

さて、再帰一所有形が被使役者として現われる場合には、どんな原則が働いているのだろうか。

再帰一所有接尾辞は主格形以外に接辞するのであるが、かならず同一文中の主語に束縛されていなければならない。

(19) a. Би найзынхаа ажлыг хийсэн.

I friend-G-RFL work-ACC do-PRF

"I did my friend's work."

b. Би одоо гэртээ харина.

I now house-L-RFL return-PRS

"I'm going home now."

c. Багш машинаараа ирсэн.

teacher car-INSTR-RFL come-PRF

"The teacher came by his car."

(19a)は属格形名詞 найз-ынに、(19b)は位格形名詞 гэр-тに、(19c)は具格形名詞 машин-аарに再帰一所有形接尾辞が付いている。そして、各々の接尾辞の主な主語と同一指示関係にある。

(20) a. s [Багш_i найзынхаа_i ажлыг хийсэн]

b. s [Би_i одоо гэртээ_i харина]

c. s [Багш_i машинаараа_i ирсэн]

再帰一所有接尾辞は文の主語に束縛される一種の照応語 (anaphor) なのである。

翻って、使役構文の被使役者に付く再帰一所有接尾辞はというと、それはか

ならず使役者によって束縛されている。

- (21) a. Цолмон нь жолоогоо сулруулав.
 Venus PRTCL reins-RFL become loose-CSTV-PST
 “Venus loosed her reins.” (y)
- b. Би бичсэн захидлаа Германд явуулав.
 I write-PRF letter-RFL Germany-L go-CSTV-PST
 “I sent to Germany my letter (I) had written.” (V)

各文の統語構造と束縛による同一指示関係を記すと、次のようになる。

- (22) a. S_1 [Цолмон_i нь S_2 [жолоогоо_i сулр-] уулав]
 b. S_1 [Би_i S_2 [бичсэн захидлаа_i Германд яв-] уулав]

再帰—所有形の被使役者は、埋め込み文 S_2 の主語であるが、同時に、それを包含する文 S_1 の目的語でもある。したがって、再帰—所有形接尾辞の先行詞は S_1 の主語、すなわち、使役者ということになる。これは使役者と被使役者との意味関係（ある行為／状態を惹き越こす者とその働きかけを受ける者）を反映していて面白い。ともあれ、被使役者が再帰—所有形接尾辞を介して使役者との間に唯一的な同一指示関係を結ぶのであるから、被使役者が常に定 (definite) であることは明らかである。

使役形動詞の語幹が自動詞である場合の対格形、ゼロ格形、再帰—所有形間の被使役者の選択は、指示的／トピック的であるか、非指示的／非トピック的であるか、定であるかという専ら意味／機能的な要因によって支配されているのである。これをまとめると、次のようになる。

- (23) 自動詞語幹の使役構文の被使役者の選択を支配する意味／機能上の原則
 :

被使役者が、

- a. 指示的／トピック的な場合は、対格形をとり、
- b. 非指示的／非トピック的な場合は、ゼロ格形をとり、
- c. 使役者との同一指示関係により定である場合は、再帰—所有形をとる。

尚、定であることは指示的であることを含意するのだから、(23a)と(23c)と

は1つに合わせられるように思われるが、逆の関係はかならずしも成り立たないばかりか、定であってもトピック的であるとは限らないので、別の項目のままにしておく。

2-2 他動詞語幹の使役構文

Comrie (1976) は、使役構文の埋め込み文の主語の統語上の位置について、次のように言及している。「埋め込み文の主語の表層での実現形は、埋め込み文の動詞の統語上の項 (arguments) に依存する。その動詞が直接目的語をもたないのであれば、埋め込み文の主語は直接目的語として現われる。直接目的語はもつが間接目的語をもたないのであれば、埋め込み文の主語は間接目的語として現われる。直接目的語と間接目的語の双方をもつのであれば、その他の斜格形の1つとして現われる。」(263頁)

彼は、この埋め込み文の主語選択のシステムを(24)の利用可能性の階層 (Accessibility Hierarchy) を用いて説明するのである。

(24) Subject > Direct Object > Indirect Object > Other Oblique Constituent

埋め込み文の主語は(24)の順序に沿って、まだ占められていない最も左側の位置へ左から右へ順次移行していく。

トルコ語の例から、移行の実態を押えておくことにしよう。

(25) (Comrie (1976) の(6)~(8))

a. Ali Hasan-t öl-dür-dü.

DO die-CSTV-PST

“Ali caused Hasan to die.”

b. Dişçi mektub-u müdür-e imazala-t-ti.

dentist letter-DO director-IO sign-CSTV-PST

“The dentist made the director sign the letter.”

c. Dişçi Hasan-a mektub-u müdür tarafımdan göster-t-ti.

IO DO by show-CSTV-PST

“The dentist made the director show the letter to Hasan.”

(25a)の埋め込み文の動詞は自動詞であり、元々、直接目的語をもっていないのであるから、被使役者（埋め込み文の主語）は Hasan-t のように直接目的語で現われる。(25b)は他動詞で、直接目的語 mektub-u をすでにもっているから、被使役者は(24)の階層に従って、まだ利用されていない最左端の位置にある項、すなわち、間接目的語が選ばれ、müdür-e として実現する。動詞が直接目的語と間接目的語をすでに有している(25c)では、自動的に未利用の次の項、斜格形が選ばれ、被使役者は具格形の müdür taraftndan となる。

(24)の文法項の階層は、類型論的に見ても、かなり広範囲に渡る言語に適用できる。しかしながら、モンゴル語の使役構文の被使役者、特に、対格形、ゼロ格形、再帰—所有形に関しては、問題があるように思われる。

モンゴル語は、他動詞の直接目的語に対格形、ゼロ格形、再帰—所有形を等しくとることができる。(24)の階層の Direct Object の位置に3つの形はすべて該当するのであるから、三者間に更に階層関係があるのかどうか、また、あるとしたらそれはどのようなものであるかを明らかにしていく必要がある。

他動詞がゼロ格形の直接目的語をもっているとき、使役構文の被使役者は対格形をとる。

(26) a. Билиг Жонсонг сҮм ҮзҮҮлэв.

Bilig Johnson-ACC temple-0 see-CSTV-PST

“Bilig showed Johnson a temple.” (Ha)

b. Багш Гэрэлийг самбар дээр Үсэг бичҮҮлсэн.

teacher Gerel-ACC blackboard on letter-0 write-CSTV-PRF

“The teacher had Gerel write a letter on the blackboard.”

文の構造と使役化以前の文は、それぞれ、(27)と(28)のようになる。

(27) a. s_1 [Билиг s_2 [Жонсонг сҮм Үз-] ҮҮлэв]

b. s_1 [Багш s_2 [Гэрэлийг самбар дээр Үсэг бич-] ҮҮлсэн]

(28) a. Жонсон сҮм Үзэв.

“Johnson saw a temple.”

b. Гэрэл самбар дээр Үсэг бичсэн.

“Gerel wrote a letter on the blackboard.”

(27)の埋め込み文 S₂の動詞 Y 3 -“to see”, бич-“to write” は, (28)に見るように, すでに, ゼロ格形の動詞 сҮмとҮсэгをもっている。そこで, 被使役者は, まだ利用されていない階層に位置する対格形ЖонсонгとГэрэлийгで現われる。(24)の Direct Object を下位区分すると, ゼロ格形>対格形の図式が得られる。

この階層関係の正当性は, 被使役者がゼロ格形で他動詞の直接目的語が対格形の例が見あたらない事実からも支持できる。元々, 使役形動詞の語幹が他動詞で被使役者がゼロ格形の文はあまり存在しないようである。手元には1例しかない。

(29) Би дуртай зөвшөөрч, гурван нохой дагуулан

I delightful admit-CSTV three dog follow-CSTV-CNV

анд явлаа.

den-L go-PRF

“I went to the den, delightfully making three dogs follow (me).” (y)

使役形動詞のある後半の節に限ると, その統語構造は次のようになる。

(30) s₁ [Би s₂ [гурван нохой даг-] уулан анд явлаа]

S₂の形は実は不完全であり, 再構される他動詞構文は直接目的語を従えていなければならない。

(31) Гурван нохой наймаг дагав.

“Three dogs followed me.”

しかし, 対格形の直接目的語を残した(32)のような使役構文が文法的であるかどうかについては, 現時点では判断しかねるので, 結論は留保したい。

(32) ? * Би гурван нохой намайг дагуулан анд явлаа.

被使役者が再帰—所有形の場合は, 次のようなパターンを示す。

(33) Би эмээгээ дагуулж хотын сайхан газраар

I granny-RFL follow-CSTV-CNV town-G good place-INSTR

тойръё.

take around-VLNT

"I'll take my granny around all the nice places in the city." (St)

文の構造と S₂の再構形は、(34)、(35)のようになる。

(34) s₁ [Би s₂ [эмээгээ даг-] уулж хотын сайхан газраар тойрьё]

(35) Миний эмээ наймаг дагна,

"My granny follows me."

両者を比較すればわかるように、(35)の他動詞構文が使役構文に埋め込まれる過程で、直接目的語 наймагは落ちる。これについても、(32)同様直接目的語が保持されている例を知らない。

(36) ? * Би эмээгээ наймаг дагуулж хотын сайхан газраар тойрьё.

(33)を見る限り、被使役者が再帰—所有形の場合、直接目的語はゼロで実現形をもたない。

使役構文に再帰—所有形の現われる例の多くは、再帰—所有形自体が他動詞の直接目的語であり、被使役者が表層において実現しない場合である。

(37) a. Чи биеэ ҮзҮүлэв ҮҮ ?

you body-RFL see-CSTV-PST INTRG

"Did you have your body examined?" (Ha)

b. Би Үсээ хараар будуулах гэсэн юм.

I hair-RFL black-INSTR to paint-CSTV say-PRF PRTCL

"I want to dye my hair black." (V)

埋め込み文の内部には、特定の人称を指さない PRO を被使役者として設定しなければならない。

(38) a. s₁ [Чи s₂ [PRO биеэ Үз-] ҮҮлэв ҮҮ]

b. s₁ [Би s₂ [PRO Үсээ хараар буд-] уулах гэсэн юм]

「誰かが君の身体を診る」のであり、「誰かが私の髪を黒く染める」のであるから、再帰—所有形接尾辞は PRO を飛び越えて使役者と同一指示の関係にある。

(39) a. Нэг хүн чиний биеийг Үзэв ҮҮ ?

"Did someone examine your body?"

b. Нэг хүн миний Үсийг хараар будах гэсэн юм.

“Someone wants to dye my hair black.”

この他に、被使役者が再帰—所有形で直接目的語がゼロ格の例、反対に、被使役者がゼロ格形で直接目的語が再帰—所有形の例は、共に見出せない。したがって、ゼロ格形>再帰—所有形、及び、再帰—所有形>ゼロ格形の階層関係はどちらも断定的に認めることができない。同じように、被使役者が対格形で直接目的語が再帰—所有形の文、被使役者が再帰—所有形で直接目的語が対格形の文も見つけることができない。

実は、モンゴル語には名詞の格形に関して、次のような共起上の制約があるのである。

(40) 文における名詞句の共起上の制約：

同一文中では、異なる機能を担う同じ格形や接尾辞形の名詞句は共起できない。

この制約により、(41)のような文はすべて排除される。

(41) a. * Би түүнийг сүмийг Үзүүлэв.

“I showed him the temple.”

b. * Тэр гурван нохой мах θ г θ в.

“He gave three dogs meat.”

c. * Би н θ х θ р θ θ Үсээ хараар будуулав.

“I made my friend dye my hair black.”

(41a)では、2つの対格形名詞句が被使役者と直接目的語の機能を担っており、(40)により非文法的な文と判定される。同様に、(41b)ではゼロ格形名詞句が、(41c)では再帰—所有形名詞句が、各々、被使役者と直接目的語の役割を演じており、どれも不適格な文とみなされる。

Comrie (1976 : 285) は、周皮的にはあるけれどもとことわった上で、ブリヤート方言における対格形名詞句の共起 (doubling) の例をあげている。

(42) Xeden mal-ā dav-ā dav-ūl-ax.⁴⁾

small herd-DO pass-DO to cross-CSTV

“He made his small heard cross the pass.”

この種の共起がハルハ方言にも散見されるか否かを判断する資料は残念ながらない。しかし、Comrie も認めているように、対格形名詞句の共起はブリーヤと方言においても極めてまれであるのだろう。

今までに述べてきた被使役者と直接目的語の格形の関係を表にまとめると、次のようになる。

(43)

被 使 役 者	直 接 目 的 語	共 起 の 是 否
対格	ゼロ格	OK
ゼロ格	対格	×
再帰—所有	ゼロ格	?
ゼロ格	再帰—所有	×
対格	再帰—所有	×
再帰—所有	対格	×
ゼロ格	ゼロ格	×
対格	対格	×
再帰—所有	再帰—所有	×

再帰—所有形は意味的に定であり、指示的であるから、対格形と同じ身分をもっていると考えられる。この推測は、(36)のように、再帰—所有形と対格形の共起した文が不適格である点からも支持できる。(36)の文が排除されるのは、(40)の制約に抵触しているからである。対格形と再帰—所有形が意味的にも機能的にも等しいふるまいをするのであれば、被使役者が再帰—所有形で直接目的語がゼロ格形という文は容認できると思われる。

被使役者がゼロ格形で直接目的語が対格形の場合と、被使役者がゼロ格形で直接目的語が再帰—所有形の場合は、両方とも、利用可能性の階層に違反するので不適格になる。

以上の考察から、(24)の階層は、暫定的にはあるが、次のように改訂することができる。

(44) Subject > Zero Case > Accusative, Reflexive-Possessive > Indirect Object >

Oblique

使役形動詞の他動詞語幹がゼロ格形の直接目的語をもっているならば、「まだ占められていない最も左側の位置へ左から右へ順次移行する」原則に従って、対格形が被使役者として選ばれる。一方、対格形と再帰—所有形の交替は、(23)と同じ意味上の原則に従う。

(45) 他動詞語幹の使役構文の被使役者の選択を支配する意味／機能上の原則

:

被使役者が、

- a. 指示的／トピック的な場合、対格形をとり、
- b. 使役者との同一指示関係により定である場合、再帰—所有形をとる。

他動詞語幹を含む使役構文の被使役者は、(40)の機能上の制約と(44)の統語上の原則と(45)の意味／機能上の原則との兼ね合いで決定されるのである。

3 具格形と与格形の被使役者

3—1 統語的な出現の環境

他動詞語幹より使役形動詞が形成されるとき、その動詞の目的語は元の形を保持するが、被使役者は具格形をとる場合と与格形をとる場合の2つのタイプに分かれる。

- (1) a. Гэрэл Дэндэвээр Наранд номыг Өгүүлэв.

Gerel Dendev-INSTR Naran-D book-ACC give-CSTV-PST

“Gerel had Dendev give Naran the book.” (St)

- b. Та Үүнийг Доржд Үзүүл !

you this-ACC Dorj-D show-CSTV-O

“Please show this to Dorj! (lit. You make Dorj see this!)”

(1a)は具格形の被使役者を、(1b)は与格形の被使役者をもつ文である。同一文中の他の名詞句との関係は、次の統語構造から明確に読みとることができる。

- (2) a. s_1 [Гэрэл s_2 [Дэндэвээр Наранд номыг θ г-] Үүлэв]
b. s_1 [Та s_2 [Үүнийг Доржид Үз-] Үүл]

(2a)の埋め込み文 S_2 には、具格形の他に与格形と対格形の名詞句が並存している。(2b)の S_2 には、与格形の他に対格名詞句が存在している。それぞれの S_2 より、次のような他動詞構文を復原することができる。

- (3) a. Дэндэв Наранд номыг θ г θ в.
“Dendev gave Naran the book.”
b. Дорж Үүнийг Үзнэ.
“Dorj sees this.”

(3a)の直接目的語と間接目的語、(3b)の直接目的語はそのままの格形で使役構文に受け継がれるが、主語は主格形から(3a)では具格形、(3b)では与格形に変わる。

これは、Comrie (1976) の提案した利用可能性の階層の改訂版 (第2節(44))に従っていることがわかる。

- (4) (=第2節(44))

Subject > Zero Case > Accusative, Reflexive-Possessive > Indirect
Object > Oblique

モンゴル語は、普通、間接目的語を表すのに与格形を用いる。具格形は斜格形に属している。こうした事実を踏まえて(4)を格形本意の記述に写し換えると、(5)のような階層になる。

- (5) Nominative > Zero Case > Accusative, Reflexive-Possessive > Dative > Instrumental

(3)の2つの文を(5)の階層に照らして見ていき、(1)の使役構文に至る過程を追ってみよう。

(3a)の主格形のДэндэвが被使役者になるときに、対格形と与格形はすでに用いられているので、自動的にそれより右側の隣接する位置にある具格形が選ばれる。(3b)では対格形が利用されているのだから、それよりも右側で一番近い位置を占める与格形が被使役者の格形となる。このような過程を経て、(1)

の使役構文が形成されるのである。

この時点では、利用可能性の階層は非常に汎用性があるようにみえる。ところが、被使役者の具格形と与格形が全く同じ環境で現われる場合が4つほど見出せるのである。

第1に、他動詞が対格形の直接目的語をもつ場合である。

- (6) a. Аав нь тэмдэглэлийн дэвтрээ гараад,
 father his notebook-RFL pass to-CNV
 Митягаар $\theta\theta$ рийн нь хҮслийг бичҮҮлэв.
 Mitjaa-INSTR self-G his hope-ACC write-CSTV-PST
 “His father passed his notebook to him and then made Mitjaa write his own hope (on it).” (y)
- b. Та над зах зээлийг ҮзҮҮлж θ гн θ ҮҮ?
 you I-D market-ACC see-CSTV-CNV give-PRS INTRG
 “Could you show me the market? (Ha)

被使役者に(6 a)では具格形 Митя- гаарが、(6 b)では与格形 надが現われている。

- (7) a. s_1 [Аав нь s_2 [Митягаар $\theta\theta$ рийн нь хҮслийг бич-] ҮҮлэв]
 b. s_1 [Та s_2 [над зах зээлийг Үз-] ҮҮлж θ гн θ ҮҮ]

(6 a)の後半部分と(6 b)の埋め込み文 S_2 を(7)の構造から見ると、被使役者の格形を除いて残りの語の形と配列は相似している。

- (8) a. Instrumental NP—Accusative NP—Verb Stem
 b. Dative NP—Accusative NP—Verb Stem

両者は共に対格形の目的語をもつ次のような文の使役化されたものであると言える。

- (9) a. Митя $\theta\theta$ рийн нь хҮслийг бичив.

“Mitjaa wrote his own hope.”

- b. Би зах зээлийг Үзнэ.

“I see the market.

(9)から明らかなように、対格形の直接目的語を含む他動詞構文が使役化を受ける過程で、主語は主格形から、(9a)では具格形に、(9b)では与格形に移行して、被使役者の資格を得るのである。これは(5)の階層に従った移行ではない。

第2は、他動詞がゼロ格の直接目的語をもつ場合である。

(10) a. Би Гэрэлээр нэг ном авчирҮҮлэв.

I Gerel-INSTR one book-0 bring-CSTV-PST

"I had Gerel bring (me) a book." (Bn)

b. Багш надад бичиг уншуулав.

teacher I-D letter-0 read-CSTV-PST

"The teacher let me read a letter." (Sa)

(10a)は具格形の被使役者 Гэрэл-ээрを、(10b)は与格形の被使役者 нададを、それぞれもっている。

(11) a. s_1 [Би s_2 [Гэрэлээр нэг ном авчир-] ҮҮлэв]

b. s_1 [Багш s_2 [надад бичиг унш-] уулав]

埋め込み文 S_2 の各言語要素の配列は、次の通りである。

(12) a. Instrumental NP—Zero Case NP—Verb Stem

b. Dative NP—Zero Case NP—Verb Stem

これを見ておわかりのように、被使役者の格形以外は形も配列も相等しい。

(13) a. Гэрэл нэг ном авчрав.

"Gerel brought a book."

b. Би бичиг уншив.

"I read a letter."

全く同じ環境で、他動詞構文が使役構文へ移行する際に、(13a)の主語は具格形に、(13b)の主語は与格形に変換されるのである。

第3は、他動詞が再帰—所有形の直接目的語をもつ場合である。

(14) a. Битгий хҮнээр биеэ ашиглуул.

PRHBTV.PRTCL man-INSTR body-RFL take advantage of-CSTV-0

“Don't let people take advantage of you.” (CD)

b. ХҮҮХДЭД ХООЛОО ЭРТ ИДҮҮЛ.

children-D meal-RFL quickly eat-CSTV-0

“Let the children eat your meal quickly.” (Ha)

(14)も被使役者が具格形(14a)と与格形(14b)の例で、共に命令形であり、第2人称の使役者を含意している。

(15) a. s_1 [PRO_{2P} битгий s_2 [хҮнээр биеэ ашигл-] уул]

b. s_1 [PRO_{2P} s_2 [хҮҮХДЭД ХООЛОО ЭРТ ИД-] Ү Ү Л]

S₂の再帰—所有接尾辞は2人称主語 PRO_{2P}（実現形は чика та）と同一指示関係にある。

(16) a. PRO_{2P1} битгий хҮнээр биеэ_i ашиглуул.

b. PRO_{2P1} хҮҮХДЭД ХООЛОО_i эрт идҮҮЛ.

また、S₂の語の配列は、次の通りである。

(17) a. Instrumental NP—Reflexive—Possessive NP—Verb Stem

b. Dative NP—Reflexive—Possessive NP—Verb Stem

被使役者の格形は別にして、語の形、配列とも(17a)と(17b)は並行関係にある。

(18) a. ХҮн танай биеийг ашиглана.

“People take advantage of your body.”

b. ХҮҮХЭД танай хоолыг эрт иднэ.

“The children eat your meal.”

他動詞構文は2人称所有代名詞付きの目的語をもち、使役構文になる過程で再帰—所有形に移行したと考えられる。この同じ統語上の環境で、(18a)の主格形主語は具格形を、(18b)の主格形主語は与格形を使役構文の中でのとるに至ったのである。

第4は、使役者と直接目的語とが双方とも省略されている場合である。

(19) a. ТҮҮГЭЭР хийлгэ.

he-INSTR do-CSTV-0

“Let him do (it).” (Ha)

b. ТҮҮнд ҮзҮҮл.

he-D see-CSTV-0

“Show (it) to him. (lit. Let him see (it).)” (Ha)

(19)は使役形の命令文である。2人称の使役者と動詞の目的語が現われていない。

(20) a. s_1 [PRO_{2Pi} s_2 [тҮҮгээр PRO_j хий-] лгэ]

b. s_1 [PRO_{2Pi} s_2 [тҮҮнд PRO_j Ү з -] Ү Ү л]

直接目的語は容易に予測できる環境にあると思われるが、これを補った形で他動詞構文を再構すると、次のようになる。

(21) a. Тэр (тҮҮнийг) хийнэ.

“He does (it).”

b. Тэр (тҮҮнийг) Үзнэ.

“He sees (it).”

使役化の過程で、(21a)の主語は具格形に、(21b)の主語は与格形になるのである。

上述した4つの事例は、完全に同じ統語的環境にありながら、被使役者は具格形か与格形のどちらか一方で実現していることを示している。明らかに(5)の階層に違反しているのである。(5)に従うならば、(6)、(14)、(21)はすでに対格形を用いているのだから、自動的にすぐ右隣の与格形を被使役者として選ぶはずである。また、(13)はゼロ格形を直接目的語のために使っているので、次の階層に当たる対格形／再帰—所有形を選ぶのが順当であろう。ところが、いずれも、このような階層の原則を無視する形で、具格形か与格形が現われているのである。両者の現われ方の背後には、統語的原則以外の要因が働いていると考えざるを得ない。それはいったい何なのだろうか。

3—2 具格形と与格形の被使役者の選択に働く意味的要因

本節では被使役者と語幹動詞との意味関係に焦点を当てて論を進めていく。初めに、被使役者が具格形の場合を、次に、与格形の場合を扱い、前節であげた例も含めて、使役構文に働く意味上の原則を究明したい。

- (1) a. Гэрэл Дэндэвээр Наранд номыг ӨГҮҮЛЭВ.

Gerel Dendev-INSTR Naran-D book-ACC give-CSTV
-PST

“Gerel had Dendev give Naran the book.”

- b. Эцэг нь залуучуудаар малдаа хэвтэр

father his youth-PL-INSTR cattle-D lying place
малтуулав.

dig-CSTV-PST

“His father asked the young men to dig up a lying place for his cattle.” (y)

- c. Тэр Митягаар ӨӨРИЙН ХҮСЛИЙГ БИЧҮҮЛЭВ.

he Mitjaa-INSTR self-G his hope-ACC write-CSTV
-PST

“He made Mitjaa write his hope.”

(1)は被使役者が具格形で対格形の直接目的語をもつ文である。他動詞語幹の意味は、ӨГ-“to give”, малт-“to dig”, бич-“to write” というように、すべて行為動詞である。動詞の意味に照した被使役者の意味役割は、動詞の行為に携わる行為者 (Agent) ということになる。

- (2) a. Би Гэрэлээр нэг ном авчирҮҮЛЭВ.

I Gerel-INSTR one book-0 bring-CSTV-PST

“I had Gerel bring (me) a book.”

- b. Жонсон Билигээр юу захиулав?

Johnson Bilig-INSTR what-0 order-CSTV-PST

“What did Johnson order Bilig to?” (Ha)

(2)は被使役者が具格形でゼロ格形の直接目的語をもつ文である。他動詞語幹は авчир-“to bring”, захи-“to order” で行為動詞であり、被使役者はその行為の行為者である。

(3) a. Битгий хүнээр биеэ ашиглуул.

PRHBTV.PRTCL man-INSTR body-RFL take advantage of-CSTV-0

“Don't let people take advantage of you.”

b. Түүгээр хийлгэ.

he-INSTR do-CSTV-0

“Let him do (it).”

(3)は命令文であり、被使役者は具格形、直接目的語は(3 a)では再帰—所有形、(3 b)ではゼロ実現である。動詞語幹 ашигл-“to take advantage of”, хий-“to do” は行為を表し、被使役者は行為者ということになる。

(1), (2), (3)のすべての使役構文が共有している意味的特徴は、使役形動詞の語幹が行為動詞であり、被使役者がその行為の行為者であるときに、被使役者は具格形で実現しているということである。

モンゴル語の具格形の用法には、主に、次の4つがある。

1つは、ある行為をする際に用いる手段や道具を表すということであり、(4)のような文を構成する。

(4) a. Би мориор ирсэн.

I horse-INSTR come-PRF

“I came by horse.”

b. Та машинаар харина уу?

you car-INSTR go back-PRS INTRG

“Are you going back by car?”

2つ目は、ある行為の行なわれる場所を示す用法で、(5)のような文に現われる。

(5) a. Энэ замаар яв!

this road-INSTR go-0

“Go this road!”

b. Тэр Үүдээр оров.

he door-INSTR enter-PST

“He entered (here) through the door.”

3つ目は、ある行為の起こる限定された時間の範囲を表すときに用いられる。

(6) a. Үүрээр явах

dawn-INSTR to go

“to go by dawn”

b. 10 жилээр суралцах

“to learn for 10 years”

4つ目は、ある行為の様態を示す副詞的用法である。

(7) a. ондор дуугаар хэлэх

loud voice-INSTR to speak

“to speak with loud voice”

b. биеэр ирэх

body-INSTR to come

“to come by oneself”

これら4つの用法から抽出できる具格形的基本的な意味は、それが常にある行為と結びついているということである。言い換えるなら、具格形は行為性を含意し、行為を表す動詞を要求するのである。それは、(4)、(5)、(6)、(7)の各例で用いられている動詞の意味を見れば、容易に納得できるであろう。

具格形自体の意味と用法を傍証しつつ、使役構文の被使役者が具格形で現われる際の意味上の原則をまとめると、次のようになる。

(8) 被使役者が語幹動詞の行為を行なう行為者であるとき、それは具格形をとる。

具格形が行為者であれば、それは行為を潜在的に行ない得るものでなければならぬから、生物性 (Animacy) をもつ、すなわち [+animate] の名詞句

であるのは当然であろう。

ところで、(8)の原則は、与格形の被使役者の意味論との対比ではじめて支持できる種類のものである。そこで、被使役者が与格形の場合を観察していくことにする。

- (9) a. Та над зах зээлийг ҮзҮҮлж Өгнө ҮҮ?
you I-D market-ACC see-CSTV-CNV give-PRS INTRG
“Could you show me the market?”
- b. Түүнд ҮзҮҮл,
he see-CSTV-O
“Show (it) to him! (lit. Have him see (it))”
- c. Энэ Үгийг хүнд сонсгож болохгүй,
this word-ACC man-D hear-CSTV-CNV to become-not
“(I/We) cannot inform the man of this word. (lit. (I/We) cannot make the man hear this word.)” (Ha)

(9)は知覚動詞 Үз-“to see”, сонс-“to hear” が使役形動詞の語幹になっている例である。(9a)と(9c)の被使役者の出現は、もちろん、(5)の階層からも説明が可能である。階層の上位を占める対格形がすでに直接目的語に使われているので、右隣りの与格形が被使役者として選ばれたと考えることができる。けれども、同じ理由で、与格形を飛ばして具格形を選ぶこともできたはずである。このことは、(9b)と(3b)の相似性からも支持できる。(3b)を(10)として再録する。

- (10) Түүгээр хийлгэ,
“Let him do (it).”

(9b)も(10)も使役者のない命令形の使役構文であるが、被使役者に片や与格形が片や具格形が現われている。

視点を変えて、語幹動詞との意味関係から被使役者を眺めると、(9)の各文の被使役者は知覚をする者ということになり、経験者(Experiencer)の意味役割を演じていることがわかる。被使役者は(9a)では「市場を見る者」であり、

(9b)では「何かを見る者」であり、(9c)では「この言葉を聞く者」であって、共に与格形で〔+animate〕の名詞句なのである。

(11) a. Цэрэн бороонд цохулав.

Tseren rain-D beat-CSTV-PST

“Tseren was beaten by the rain. (lit. Tseren let the rain beat (him).)”

(Sa)

b. Та салхинд цохилжээ.

you a cold-D beat-CSTV-PRF

“You have a cold. (lit. You let a cold strike (yourself).)” (Ha)

(11)の各文に共通な語幹動詞 цохи-“to beat”はそれ自体行為動詞であるが、被使役者が бороо“rain”, салхи“a cold”という無生物であるから、動詞と被使役者との間に行為者と行為動詞の意味関係を成立させることができない。むしろ、被使役者は起因者 (Source) の意味役割を担い、動詞は「打つ、叩く」という行為ではなく、「打っている、叩いている」という動的な状態を記述していると解釈するのが妥当であるように思われる。

こうして見ると、被使役者が(9)では経験者、(11)では起因者であり、共に非行為者 (Nonagent) であることがわかる。被使役者が非行為者であるときに、その実現形は与格形なのである。

使役構文の被使役者が与格形で現われる際の意味上の原則をまとめると、次のようになる。

(12) 被使役者が語幹動詞の意味に対し非行為者 (経験者、起因者等) であるとき、それは与格形をとる。

原則(12)にはかなりの一般性があるが、一見反例と思われるような文も同時に存在している。

(13) a. Багш надад бичиг уншуулав.

teacher I-D letter-O read-CSTV-PST

“The teacher let me read a letter.” (Sa)

b. ХҮҮхдэд хоолоо эрт идҮҮл.

children meal-RFL quickly eat-CSTV-O

“Make the children eat your meal quickly.” (Ha)

(13)の2文の語幹動詞は，*уни*“to read”，*ид*“to eat”のように行為動詞であり，しかも，被使役者は〔+animate〕の名詞句で，動詞の行為を行なう行為者である。このような環境では，(8)の原則によって被使役者は具格形をとるはずであるのに，実際は，与格形が現われている。

そこで，(13)には統語上の原則が優勢に働いているのだと判断し，(5)の階層に解決を求めることもできる。この解決法は(13b)には適用できるかもしれない。なぜなら，直接目的語に再帰—所有形が用いられているので，自動的に右隣の与格形が被使役者の第1候補として選ばれるからである。ところが，階層による説明でも，(13a)は説明できない。(13a)では，直接目的語はゼロ格形であるから，被使役者に対格形も与格形も具格形も等しくとることができ，与格形が採用されなければならない必然性が出てこないのである。

ところで，与格形には，受動構文の行為者の表示という用法がある。

(14) a. Эрдэнэ хулгайчид булаагдав.

jewel thief-D grab-PSSV-PST

“The jewel was grabbed by the thief.”

b. Миний хөл нохойд зуугдав.

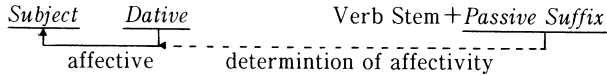
I-G leg dog-D bite-PSSV-PST

“My leg was bitten by the dog.”

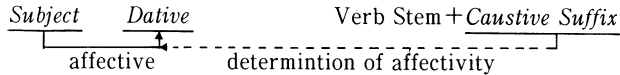
モンゴル語の受動構文には，日本語の間接受身（被害者の受身）文のように，何らかの好ましくない影響を被るという意味があるように思われる。その場合，影響を及ぼすものは与格形の名詞句であり，影響を受けるものは主語である。この影響の方向は，受身形接尾辞（(14)では-гда）によって定められている。他方，使役構文では，普通，この方向が反対で，主語から与格形の名詞句に影響が及ぶ。この影響の方向を規定するのは，使役形接尾辞であると考えられる。もしモンゴル語の与格形接尾辞に影響性（Affectivity）という意味が固有に備わっていて，動詞語幹に付く接尾辞によって影響の方向性が決定されると考え

るならば、受動構文と使役構文とは、(15)に見るように、方向性に関して正反対の様相を呈していることになる。

(15) a. Passive :



b. Causative :



影響性に関して、受動構文と使役構文とが同じ意味特徴を共有しているかどうかは今後の研究をまたなければならないが、少なくとも現時点で言えることは、行為動詞語幹の使役形動詞に与格形の被使役者が現われるときには、具格形の被使役者が現われるときよりも、影響性の含意が強いのではないかということである。(13a)では「私は先生に強制的に読むという行為をさせられた」という含意が、(13b)では「子供たちは命じられるか促されるかして食べるという行為をさせられた」という含意が生ずるのではないかと仮定できるように思われる。もしそうであるならば、被使役者は自らの意志を押えられて何らかの行為をするという点で、制御を受ける行為者 (Controllable Agent) ということになり、行為者というよりも被患者 (Patient) としての色合が濃い。(13)の被使役者が行為者ではなく被患者であれば、(12)の反例にはならない。但し、以上の考察は確認され証明されたことではなく、解決への糸口を提案しただけなので、結論は留保しておきたい。

4 ゼロ実現の被使役者

第1節で述べたように、使役構文には使役者と被使役者とが必須の要素である。ところが、一定の条件さえ整えば、被使役者が表層に現われなくてもよい場合がある。その条件を明らかにするのが本節の目的である。

4-1 差し押え

- (1) a. Дорж ирвэл та энэ таслагаанд суулга.
 Dorj come-if you this room-L sit-CSTV-O
 “You let (him) sit down in this room if Dorj comes.” (Ha)
- b. Нөхөр Бямбааг ирвэл та надтай яриулна шүү.
 comrade Bjambaa-ACC come-if you I-CMT talk-CSTV-PRS
 CMFMTV.PRTCL
 “You let him talk with me if Mr. Bjambaa comes, don't you?” (V)

(1)は主節の使役構文に被使役者の現われていない文である。ゼロ実現の被使役者を PRO で表示すると、次のような意味解釈が成立する。

- (2) a. s_1 [s_2 [Дорж_i ир-] вэл_{s3} [та_{s4} [PRO_i энэ таслагаанд суу-] лга]]
- b. s_1 [s_2 [Нөхөр Бямбааг_i ир-] вэл_{s3} [та_{s4} [PRO_i надтай яри-] улна] шүү]

PRO は副詞節の主語と同一指示関係にある。副詞節の語幹動詞が自動詞であり、したがって、主語に名詞句を1つだけとり、主節は使役構文であるので、その主語は使役者であることがはっきりしている。このような透明な環境では、被使役者は唯一的に副詞節の主語と同一指示の関係にあることが指定できる。被使役者の正体が透明な環境で保証されるとき、それは実現しなくてもよい。この種の現象を削除と対比させて「差し押え (suspension)」と呼ぶことにしよう。差し押えと削除との相違は別の研究で詳述することにして、ここでは、差し押えが差し押えられる要素があってもよいという形で働くとだけ記しておく。(1)の文で差し押えられた要素は被使役者であるが、もちろん、実現形として使役構文中にあってもよいのである。

- (3) a. Дорж_i ирвэл та түүнийг_i энэ таслагаанд суулга
 b. Нөхөр_i Бямбааг_i ирвэл та түүнийг_i надтай яриулна шүү

(3)では本来ゼロ実現であった所に対格形の實現形が出現している。この対格

形の被使役者はそれぞれの副詞節の主語と同一指示関係にある。

差し押えによるゼロ実現は、トピックの連関性の強い場合に起こり易い (Givon (1983))。トピックの連関性の中で先行文脈のある要素と意味上の首尾一貫性が確保されるときに、当該の要素はゼロ実現をとる傾向があるのである。ゼロ実現の要素はそれだけに強い定性を示し、対格形や再帰—所有形と同じ機能を果すと言えるだろう。

以上の事実をまとめると、次のようになる。

- (4) 副詞節の主語と同一指示の関係にある場合、主節の使役構文の被使役者は実現形をとらなくてもよい。

4—2 一般的人称の含意

- (5) a. Тэр тэгҮҮлэхҮй.

he to do thus-not

“He won’t allow that.” (CD)

- b. ЗҮгээр оруулна !

freely enter-CSTV-PRS

“Admission free! (lit. Allow to enter freely!)” (CD)

- c. Цуудайны боолт олс дутах нь байна,

sack-G bandage rope to be insufficient PRTCL be-PRS

гаргуулж θ г θ ч.

bring out-CSTV-CNV give-VLNT

“It looks like the cord for tying the sacks is running out; Please have (someone) issue (us some).” (St)

(5)も被使役者が現われていない使役構文の例であるが、同一指示関係にある先行詞をもたないという点で、(1)とは異なる。(5 a)には使役者に当たる主語が存在している。(5 b), (5 c)には使役者は現われていないが、文の形や動詞の接尾辞からそれが2人称(及びそれに準じるもの)を指すことがわかる。使役者と被使役者の意味関係を表すと、次のようになる。

- (6) a. s_1 [Тэр s_2 [PRO тэв-] Үүлэхгүй]
 b. s_1 [PRO_{2P1} s_2 [зҮгээрPRO_i ор-] уулна]
 c. s_1 [PRO_{2P1} s_2 [PRO_j (боолт олс) гарг-] уулжк θгθθч]

使役者が тэрであれ PRO であれ，被使役者の先行詞ではない。むしろ，被使役者は特定の指示対象をもたず，一般的な人称を示すと考えた方が事実に近いように思われる。つまり，被使役者の PRO は [+human] のような人称性に関する意味標示だけをもった非指示的なゼロ名詞なのである。

- (7) 被使役者が一般的な人称を示す場合は，実現形をとらなくてもよい。

5 使役形動詞の語彙化

使役形動詞は原則として使役者と被使役者の2つの主語を含んでいる。使役者は使役形接尾辞の主語であり，被使役者は語幹動詞の主語である。使役者は，また，被使役者がある行為／状態に向かうための原因／理由の役割を果たす。このように意味関係が透明であるときには，使役構文の使役性も明示的であるが，時として，それが不透明になる場合がでてくる。特に，語幹動詞が自動詞のときに，その傾向が強い。

自動詞は本来直接目的語をとることができない。主語以外の名詞句をとりたい場合には，斜格形にするか，対応する他動詞と入れ替えた後で直接目的語をとらなければならない。

今まで述べてきた使役構文化は，自動詞を他動詞化して直接目的語をとる道を開く方法でもあるのである。

- (1) a. Тэр намайг сургуульд явуулна.
 he I-ACC school-L go-CSTV-PRS
 “He makes me go to school.”
 b. Тэр номыг Монголд явуулна.
 he book-ACC Mongol-L go-CSTV-PRS
 “He sends the book to Mongolia.”

(1)は自動詞 яв-“to go”に使役形接尾辞が付いた使役構文であり，双方とも

被使役者として対格形をもっている。文の構造も、(2)で示すように、全く同じである。

- (2) a. s_1 [Тэр s_2 [намайг сургуульд яв-] уулна]
 b. s_1 [Тэр s_2 [номыг Мөнгөлд яв-] уулна]

ところが、埋め込み文 S_2 から対応する自動詞構文をつくると、適格性に違いが出てくる。

- (3) a. Би сургуульд явна.
 “I go to school.”
 b. *Ном Мөнгөлд явна.
 “The book goes to Mongolia.”

私は学校へ行けるが、本は単独ではモンゴルへ行けない。(1b)は(2b)のようにではなく、(4)のような構造に再分析した方がよい。

- (4) s [Тэр номыг Мөнгөлд явуулна]

(1b)は埋め込み文を含まず、「主語—直接目的語—方向／場所名詞句—動詞」という単文と解釈できる。それゆえ、явуул-は自動詞と使役形接尾辞の組合せとしてではなく、全体で1つの他動詞として位置づけることができる。辞書でも явуулах を他動詞として扱い、独立の項目を与えている。

- (5) явуулах “to send, dispatch, post, carry out”
 a. захидал явуулах “to send a letter”
 b. томилон явуулах “to sent out an official business”
 c. кампанит ажил явуулах “to carry out a campaign”

явуулахは(1a)のように使役形動詞の場合と(1b)のように語彙化した場合との間に、統語上及び意味上の揺れがあるのである。

語彙化が更に進むと、使役性が消失し、ごく普通の他動詞構文をつくるようになる。

- (6) a. Тэд гол гудамжийг байгуулж дууслаа.
 they main street-ACC construt-CNV finish-PRF
 [б а й х -CSTV]

“They have finished constructing the main street.” (St)

b. Та намайг түүнд танилцуулав.

you I-ACC he-D introduce-PST

[таних-CSTV]

“You introduced me to him.”

(6 a)の対格形 гол гудамж- ийг も，(6 b)の намайг も被使役者としてではなく，動詞の直接目的語として機能している。それは，これらを主語にした文の適格性が落ちる事実からもはっきり見てとることができる。

(7) a. ? Гол гудаж байна.

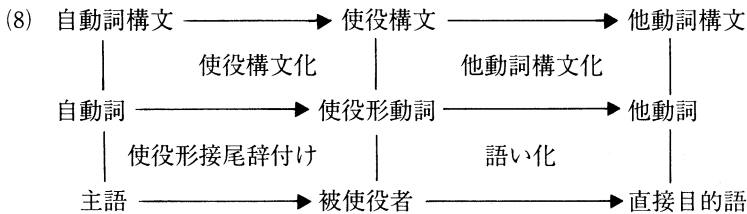
“The main street exists.”

b. * Би түүнд танилцав.⁵⁾

“I made the acquaintance of him.”

使役形接尾辞は，(6)で単に他動詞を形成するだけの機能しかもたず， байг-уул- “to construct, establish, танилцуул- “to introduce” は辞書に独立した項目で掲載されているのである。

使役形動詞の語彙化とそれに伴う使役構文の他動詞構文化の過程を図で表すと，次のようになる。



(一次的主語) 統語上の降格 (二次的主語) 機能上の降格

真中の列の動詞に着目して(8)の過程を追ってみたい。自動詞が使役化するのに応じて自動詞構文も使役構文化し，その主語は一次的なもの(主格形)から二次的なもの(ゼロ格形，再帰一所有形)に降格する。次に，使役形動詞が語彙化して他動詞になるのに伴い，使役構文は他動詞構文に，二次的主語である被使役者は他動詞の直接目的語へと降格するのである。

語彙化を惹き起こす要因については、よくわからない。使用頻度と相関があるかもしれないし、既存の動詞に対応する他動詞がないために、そのギャップを埋めるために生じるかもしれない。要因が何であれ、一定の条件を満たささえすれば語彙化へと傾く潜在性が、モンゴル語の使役形動詞に備わっているのである。他の派生動詞（たとえば、受身形動詞）を含めて、通時的／共時的研究が今後またれるところである。

6 む す び

使役構文に現われる6つのタイプの被使役者の実現形の出現に働く条件や原則などを究明することが本研究の目的であった。これまでの考察で明らかになった原則をもう一度まとめて記すことにしよう。

- (1) 格形より見た利用可能性の階層（統語上の原則）：

被使役者の格形は、次の階層の順序に沿って、まだ利用されていない最も左側の位置へ左から右へ順次移行していく。

Nominative> Zero Case> Accusative, Reflexive-Possessive> Dative>
Instrumental

- (2) ゼロ格形、対格形、再帰—所有形の選択に働く原則（意味／機能上の原則）：

被使役者が、

- a. 指示的／トピック的な場合には、対格形をとり、
- b. 定である場合には、再帰—所有形をとり、
- c. 非指示的／非トピック的な場合には、ゼロ格形をとる。

- (3) 具格形と与格形の選択に働く原則（意味上の原則）：

被使役者が、

- a. 語幹動詞の意味に対して行為者である場合には、具格形をとり、
- b. 語幹動詞の意味に対して非行為者である場合には、与格形をとる。

- (4) ゼロ実現の選択に働く原則（意味上の原則）：

被使役者が、

a. 副詞節の主語と同一指示の関係にある場合か、

b. 一般的人称を指示する場合、

ゼロ実現でもよい。

(5) 文における名詞句の共起上の制約（機能上の原則）：

同一文中では、異なる機能を担う同じ格形／接尾辞の名詞句は共起できない。

モンゴル語の使役構文の被使役者は、実に、統語上の原則、意味上の原則、及び、機能上の原則が相補い合う形で働く結果、適切な形となって実現するのである。

文法の諸問題は、統語論の枠組だけで、あるいは、意味論や機能論の枠組だけで説明しようと試みるのでは不十分である。1つの文法現象の根底には3者が相互補完的に作用し合っていて働いているのであり、この実相を見極めて初めて、当該の文法現象の真の姿を余す所なく説明できるのである。

相互補完主義のアプローチは、使役構文の被使役者の実現形の交替現象にも効力のあることがわかった。更に多くの文法現象にも適用して、この研究方法を洗練し、整備し、その有効性を実証していくことが今後の課題である。

(注)

- 1) 母音調和の原則に従って各接尾辞は交替する。
- 2) 語幹が長母音か二重母音で終るとき、-r-がそう入される。
- 3) (4a)は否定命令文であり、2人称に向けられたものなので、埋め込み文の元の形は意味本位で復原されている。
- 4) この例の出典は明らかでないが、動詞の形動詞形は時制をもたないから、単独では文末にこれないはずである。
- 5) 但し、Би түүнтэй танилцавであればよい。

〈省略記号〉

ABL	: Ablative	P	: Person
ACC	: Accusative	PL	: Plural
CNFMTV	: Confirmative	PRTCL	: Particle
CMT	: Comitative	PRF	: Perfective

橋本邦彦

CNV	: Converb	PRHBTV	: Prohibitive
COMP	: Complement Marker	PRS	: Present
CSTV	: Causative	PSSV	: Passive
D	: Dative	PST	: Past
G	: Genitive	RFL	: Reflexive Possessive
HBT	: Habitual	VLNT	: Voluntative
INSTR	: Instrumental	O	: Zero Form
INTRG	: Interrogative		
L	: Locative		

引用文献

- (Bn) : Binnick, R. I. (1979) *Modern Mongolian: A Transformational Syntax*.
(CD) : *A Concise English-Mongolian Dictionary*.
(Ha) : Hangin, J. G. (1968) *Basic Course in Mongolian*.
(Sa) : Sanzheyev, G. D. (1973) *Modern Mongolian Language*.
(St) : Street, J. C. (1962) *Khalkha Structure*.
(y) : Унших Бичиг.
(Y_n) : ҮНЭН.
(V) : Vietze, H.-P. (1978) *Lehrbuch der Mongolischen Sprach*.

参考文献

- Binnick, R. I. (1978) *Modern Mongolian: A Transformational Syntax*. Univ. of Toronto Pr.
Comrie, B. (1976) "The Syntax of Causative Constructions: Cross-Language Similarities and Divergences," In (ed.) M. Shibatani: 261-312.
Givon, T. (ed) (1983) *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. John Benjamins.
Hangin, J. G. (1968) *Basic Course in Mongolian*. Indiana Univ. Pr.
——— (1970) *A Concise English-Mongolian Dictionary*. Indiana Univ. Pr.
Hangin, J. G. et al. (eds.) (1986) *A Modern Mongolian-English Dictionary*. Indiana Univ. Pr.
橋本邦彦 (1987) 「対格の目的語の意味論と機能論」 *モンゴル研究* No.18.
Keenan, E. L. (1987) *Universal Grammar: 15 Essays*. Croom Helm.
小沢重男 (1963) *モンゴル語四週間*. 大学書林。
(1983) *現代モンゴル語辞典*. 大学書林。
Sanzheyev, G. D. (1973) *Modern Mongolian Language*. Nauka.
Shibatani, M. (ed.) (1976) *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Con-*

被使用者；モンゴル語の使役構文の研究

- structions. Academic Pr.
- Street, J. C. (1962) Khalkha Structure. Indiana Univ. Pr.
- Ш а р а в , С. et al. (eds.) (1978) Унших Бичиг. Улаанбаатар.
- 寺村秀夫 (1982) 日本語のシンタクスと意味 I。くろしお出版。
- Vietze, H.-P. (1978) Lehrbuch der Mongolischen Sprach. VEB Verlag Enzyklopadie.